【ねがいましては】

平成２８年３月２５日　　*KYOWA SCHOOL*
第３０５号

「叱られたくないから」

よく子どもたちが悪いことをしたときに、「〇〇ちゃんがいけないんだよ。」と、他人に事の責任を押しつけることがあります。もちろん叱られたくないからです。

子どもの中にある一つの判断基準、叱られるからやらない、叱られなければやる・・・。

もちろん物事の判断基準がまだよく分からない年齢での「叱る」は、一つのしつけの意味があるように思います。道に落ちているものを拾って口に入れてはいけない。道路へ急に飛び出してはいけない。このようなことは、説明しても理解できない年齢で起こりがちなので、ガツンと叱ると条件反射が効いてやらなくなるかもしれません。これ、ペットにも効き目がありそうです。

やがて年月が経ち小学校、同じようにガツンと続けていると、先ほどの叱られなければ良い、叱られるからやらないという判断が常態化してきます。その後、その心理は「いじめ」などに形を変化させたりもします。いじめは必ず叱られない環境を確認してから起こります。

テストでも同じこと・・・悪い点を取れば叱られるから、１点でもいいから良い点を取りたい。だからカンニングをしたい。わからなくても適当に書き込む・・・。カンニングはバレなければ叱られません。わからないのに適当に書き込むことも全くといってよいほどバレません。本来わからなければ書き込めません。しかしこれをお読みになっているお母さんやお父さんにも覚えはあるはず・・・わからなくても書き込んでいたはずです。

入試でも同じこと。わからなくても記号で答えるものは必ず記入しています。まぐれ当たりがある以上記入します。まじめに取り組んできた子どもたちにとっては複雑な心境でしょう。

叱られるからやらない。叱られなければやる。という判断はかなり危険なものだと思います。この環境が当たり前で成長した子どもたちは、物事の判断基準を常に他人を意識したところへ置くことになります。他人がいなければすべてが自由になります。つまり叱る人がいませんので何でもやり放題・・・。人の行動はこれではっきりとしてきます。先ほどのいじめが典型的なものになります。

ところが、勉強になるとどうでしょう。悪い点数だと叱られる、良い点数なら叱られない。それどころか良い点数はホクホクの笑みで褒められるのかもしれません。やはり他人を意識したところに判断基準を置くと、本来の「学び」からほど遠い感情を抱いてしまいます。常に結果を意識する生活・・・。結果・・・。

子どもたちの中で、あまりにも結果を気にしすぎて真っ白になってしまう子がいます。あがり症・緊張症とでもいうのでしょうか。この症状は高所恐怖症や、閉所恐怖症など、その場の環境の変化によって、精神的に動揺を起こしてしまうもの・・・。ゴキブリが出てきただけで、「キャー」・・・失神寸前になってしまうようなものです。

このように、他人のせいにするのではなく、自己の責任だとまじめに捕らえてしまう子は、結果を大きく捕らえがちになるようです。当然結果を最大のテーマにしているわけですから、１点たりともミスはできません。が、過去の自分がよみがえります。つまり、悪い点を取って親から聞きたくない言葉を浴びせられたあの思い出です。または、心ない級友から浴びせられたあの言葉です。ゴキブリ登場と同じ心境です。

過去にこだわるあまりに先へ進めない状態です。同じことが繰り返されるのでは・・・・。

勉強に対して、もっと自由になれたらいいなとつくづく感じます。

ここに通う子の中に、小学生でありながらすでに数学や英語に取り組んでいる子がいます。その取り組む姿が実に理想的なのです。他を意識しない。結果を意識しない。我が道を淡々と歩む・・・。わからないところがあればすかさず質問をする。真の学びを楽しんでいます。

もし過去にこころない言葉を口にされたご経験がおありでしたら、そこは素直にお子さんに謝罪されるのが良いかもしれません。結構お子さんは過去の「事件」をはっきりと記憶しているものです。

何が良くて何が悪いかは、自身が決めるもの。その判断基準を持って結果を意識することなく、淡々と歩んでいただきたいものです。学びの楽しさをただただ知っていただきたい。他人との比較は学びには必要はありません。勉強を競争の一つ（順位）にしてしまうのも真の学びではありません。

お子さんが前向きに生きようとなさっている。その姿を見て目頭を熱くされる母、そして父。至福の感情がこみ上げてくるのではないでしょうか。

結果よりも今、今を精一杯に生ききっている姿が最も尊い姿だと思います。

過去の「ねがいましては」で触れさせていただいたことがありますが、ある子どもが父に褒められたいがあまりに猛烈に勉強に打ち込みました。その結果これだったら褒められるに違いないと思う成績を収め、そのことを父に報告しました。そして父から出た一言・・・「本気だったのか」・・・少年はハッと我に返ります。父だけを意識した自分がいた。なんて小さな自分なのだろう。自身の精一杯を考えず、ただ「褒められたい」だけの小さな自分を恥じたそうです。その少年は現在立派な社会的指導者になっているとのことです。なあみんな、自分に本気になろうね。ありがとう。